



## バイオ医薬と日本でのキャリアの可能性

加茂 慶大

### 変革期の医薬品業界

医薬品業界は大きな過渡期に差し掛かっている。

以前のような大型品の開発が難しくなり、アンメット・メディカル・ニーズの領域での開発を進めることで研究難易度が上がった。これまでの低分子医薬品からタンパク質由来・生物由来の物質などにより産生されるバイオ医薬品を用いた開発へと変化してきた。

すでにバイオ医薬の売上は2,000億ドルを超えた市場規模になっており、日本市場に限らず大きなマーケットである。世界売上の上位品目を見てもバイオ医薬品が占め、その中に日本企業の品目はほぼない。日本がグローバルの中で存在感を残していくためにも、この領域での研究開発が必須となってくる。

しかし、その中で日本の存在感は薄い。バイオ医薬品を生み出していくには課題も多いのである。多額の開発費用や、生体由来のため大量生産が難しく、製造工程など技術的な面なども負担が大きい。また、これまでの医薬品開発が低分子であったが故に、バイオの研究者をはじめとしたバイオ医薬品への人材体制がまだ整っていない企業もある。

### バイオベンチャーの台頭

グローバルファーマはビジネスモデルを早くから変化させ、自社開発からパイプラインの導入やM&Aなどでバイオ医薬品を上市してきた。そして、その中で各バイオベンチャーが自社品を持つことも自然になってきている。Gilead Sciences Inc., Amgen Inc., Genentech Inc., Celgene Corporation, BioMarin Pharmaceutical, などの代表例もある。

日本ではどうか。実は日本でのバイオベンチャーは年々増えており、すでに500社を超えている。直近では大学が抱える研究シーズをもって、ベンチャーを設立する大学発ベンチャーも増えており、今後も企業数は拡大することが予想される。実際に開発も進んでおり、バイオベンチャーが国内外で進めているパイプライン数は200品目超とも言われており、すでに導出や共同研究を製薬メーカーと進める企業も出てきている。

当初から日本だけでなく、海外の上市を視野に開発を続け、アメリカなどに拠点を持つケースもある。

バイオベンチャーの上場基準は国際的にも厳しいと考えられているため、日本ではまだ多くの企業がベンチャーから上場への道へたどり着いていないが、多くのバイオベンチャーがチャレンジを続けている。

### 人材ニーズの可能性

バイオベンチャーでの採用ニーズは年々増加している。

弊社の紹介実績動向で見ても、2015年は医薬品業界においてバイオベンチャーへの紹介実績は7%程度だったが、2018年では15%に増加している。バイオ人材が製薬メーカーのみでなく、ベンチャー企業からも求められるようになり、活躍の場を広げていることがわかる。

バイオベンチャーへ転職する方は年齢面でもその勢いを裏付けることができる。アカデミアの人材・製薬メーカーからの転職なども含めて、30代の年齢層はすでに全体の25%ほどを占めている状況である。

製薬メーカーの研究所は閉鎖が進む中で（各バイオベンチャーの成長ステージによって異なるが）、研究職などの採用から始まり、商用化に向けての専門職を募集している。このような変化の背景には、バイオベンチャーの環境が整いだしていることもあげられる。

これまでも国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）などをはじめ、各種施策を行ってきた政府だが、2019年6月には、バイオ戦略2019を閣議決定し、その中でもバイオファースト発想や、バイオコミュニティの形成などをはじめ、今後のバイオ医薬関連市場への注力も決まっている。

また、ベンチャーキャピタルが医療分野への投資を積極的に行うようになってきた。以前は、医療業界は他の業種と比較して、ビジネスの成功までに非常に長期間を要するという特性と事業内容自体の専門性から、収益構造を判断しづらいなどの理由で投資判断基準が厳しかった。そのため投資対象にされにくかったが、ヘルスケア専任の投資担当者が増え、適切な評価の基、投資判断が行われるようになったからである。

日本の大きな業界変化のタイミングで、これまでのキャリアにとらわれず、新しい機会を見つけ、中長期的な目線で自分のキャリアを考えてみることをお勧めしたい。

